

北九州芸術劇場 + 市民共同創作劇

平成28年度

Re: 北九州の記憶

戯曲集



はじめに

私たちが記録として知っている「街の歴史」には当然のことですが、私たちの身の回りの、ごくごく個人的なことについては記されていません。ですが、確かに当時を生きた人達はその場所に住んで、日々を暮らしていました。その時代に生きた家族のこと、仕事のこと、結婚のこと・・・様々なエピソードの「個人の歴史」が集まるとそれもひとつの「街の歴史」になるのではないのでしょうか。

「R? 北九州の記憶」では、北九州市に暮らす高齢者の方々に、地元の若手作家がインタビューを行い、1つのエピソードから発想を得た新しい物語を作りました。

この作品を通して、過去も未来も主役はこの街に暮らす私達である事に気付く事、そしてこの作品達が、この街の財産となる事を目指しています。



目次

別れの前日

作 穴迫信一 . . . . . 1

こんにゃく芋のはなし

作 鶉飼秋子 . . . . . 12

いただきます

作 大迫旭洋 . . . . . 26

カブちゃん

作 大迫旭洋 . . . . . 41

洗濯川

作 寺田剛史 . . . . . 57

それもきつと本当

作 寺田剛史 . . . . . 67

第3の男

作 渡辺明男 . . . . . 84

門司のヤンキー、喫茶店に行く

作 渡辺明男 . . . . . 99

## 別れの前日

作 穴迫信一

### 【登場人物】

- 恵美 80歳、自身の葬儀式のリハーサルをしている  
孝美 54歳、恵美の息子  
佳子 50歳、恵美の娘  
園長 94歳、保育園の元園長。絹子の元上司。

公民館、のような広い一部屋。

恵美を中心に数名が集まって、葬儀式のリハーサルを行っている。  
中央やや上手に2mぐらいの大きな遺影が飾ってある。額縁はシヨツ  
キングピンクで派手である。

### 【1】

恵美

いつも私と会うときはおいしいケーキやアイスを振る舞ってくださいました。おかげで血糖値があがり、でもこれからはその心配もないようです。向こうでは甘いもの食べ過ぎないようにしてくださいね。

小川先生、沢山の思い出をありがとうございます。先生のご冥福を、先生のすべての教え子とともに、心からお祈り申し上げます。

恵美、ぽーっと立っている孝美に気付く

泣き

…え？

泣かんと

泣く？

恵美

やけんここで私のこと思い出して私が甘いもん好きやったとか私が医者に甘いもの止められとったとか私が回転寿司行ってもプリンとプチエクレアの皿しかとらんかったとかさういうこと思い出して泣かんと!!

孝美

…はいはい、ううう

孝美、しょうがなく泣きまねをする

恵美

(泣いてる孝美に対して) まだ薫さん何も喋ってないから!

孝美

内容だつて母さんの予想やろ

恵美

いいや薫さんは私が甘いもの食べよつた思い出ぐらいしかないよ

孝美

そんな人に弔辞頼むなよ!

惠美  
孝美  
惠美  
孝美  
惠美  
孝美  
惠美

お母さんは心を許した人としか甘いもん食べんのよ！  
やったら共感しづらいやないか！  
ほとんどの人は経験あるけ！  
じゃあなおさらまずいやろ！  
なんがね！  
甘いもの話にぼかんとしとる人は心許されてない人つちゅうことになる  
んやないんか  
：ほんとや

惠美、紙にメモしている

孝美  
惠美  
孝美  
惠美  
孝美  
惠美  
孝美  
孝美  
孝美  
孝美

(紙をのぞいて) ボルトとか安倍晋三は無理やろ  
分らんやろ  
弔辞は知り合いに頼むんよ  
人類皆兄弟  
始まった  
同じ時代に生まれたというご縁  
ボルトが何人か知つとんか  
何人でもいいんよ足早いんやけ  
意味が分からん



恵美の娘、佳子が入ってくる

恵美　　気にせんでいいちこと、（携帯を見て）あら

恵美、去る

孝美、佳子に気付く

佳子　　兄ちゃんも来とつたんや

孝美　　佳子もか、今母さん出てつたよ

佳子　　どこに

孝美　　誰かから連絡来たんかな、、ポルト？

佳子　　陸上の？

孝美　　母さん、ポルト好きやろ

佳子　　え、それで、来ると？

孝美　　まあ来んとは思うけどねえ、でも足速いんやつたら…

佳子　　関係ないやろ

孝美　　佳子、ポルトって何人？

佳子　　知らんし、ウクライナかジャマイカかそこら辺やないん

孝美　　じゃあ葬式とか知らんやろうな

佳子

そうかね

孝美

あんまり人も死なんやろうし

佳子

そんなことはないやろ

孝美

100m何秒と思っとん

佳子

知らんし

孝美

調べとこ

佳子

そういうとこ似とようね、母さんに

孝美

どういうとこ？

佳子

変に真面目というか

孝美

そりゃあ佳子も同じよ

佳子

まあね、母さんがあれやとね…

孝美

あとは安倍さんと、ビートたけしと…

佳子

無理やろって

孝美

マイケルジャクソン

佳子

それは絶対無理やん

孝美

これは母さんの方から会いに行くことになるな

佳子

それもなんやけどさ

孝美

人類皆兄弟！

佳子

母さんまだまだ死なんやろ

孝美

：

佳子

元氣やんあの人

孝美  
佳子

そうやな

理想の葬式も何もないやろ

【3】

惠美、戻ってくる

惠美

象来るよ

孝美

象?!

惠美

来るよ

佳子

何でよ

惠美

乗るけよ

孝美

買ったんか

惠美

一応そういうことで話すすめとる

佳子

何で乗るん

惠美

火葬場まで運んでもらうんやないね

佳子

は?!

孝美

安定せんやろ!

惠美

そういう問題やないやろ、象よ

佳子

そうよ、え?分かつとるんやん

惠美

でも母さん死ぬ前に一回乗ってたんよ

佳子

じゃあ生きとるうちに乗りいよ！

孝美

佳子、母さんの夢なんよ分かってくれ

佳子

やけまだ夢叶えられるんよ

恵美

インドやないやん

佳子

え？

孝美

母さんは、象に乗って「インドを」旅したいんよ

恵美

生きとるうちに乗ったらそういう欲求も出て来てしまうんよ

佳子

やけって

恵美

そしたら今度はカレーが食べたくなるよ、インドやから

孝美

人間はそういうもんやな、次から次へと欲求がな

恵美

死んだらそういうわがままも言えんやろ

佳子

インドで象乗ってカレー食べるぐらい頑張れば出来るやろ

恵美

頑張ることやないんよ

孝美

それに実際に行くってなったら面倒やろ母さんも

恵美

そうなんよ

佳子

じゃあ死んでまで象発注することないやん

恵美

まだ母さん死んでないやろ

佳子

まだ母さん死んでないやろ！

恵美

：

佳子

確かに本場のカレー屋さんでナン回しよる人たちは陽気で愛想もよくて

サービス精神旺盛で私も嫌いにはなれん。でもね、あの人達全員がインド

恵美  
佳子  
恵美

人なわけやないし、たまに見かけるのが丁度いい距離感なんやない？いや知らんけど、そうじゃなくて、お母さんはそんな早よ死にたいん？こんな早くから準備するものやないよ葬式ってこれもご縁やと思っただけ  
何でもかんでもご縁ってそれで痛い目も見とるやろ、騙されたことだってよくしてもらったこともあるけ

【4】

園長がノロノロと入ってくる、かなりヨボヨボだ

園長

ごめんください

恵美

あら、園長

園長

恵美ちゃんごめんなさい少し遅れたね

恵美

わざわざありがとうございます

園長

何言いよんかね、50年近いご縁なんやから当然よ

恵美

本当にすみません

園長

にしてもええねえ、こんな熱心に葬式の準備してもらって

恵美

リハールちゆうんですよ

園長

かっこええねえ

園長、孝美と佳子に気付く

園長

あら

孝美

うちの子どもです

孝美

どうも

園長

孝美くんやっつけたっけ

孝美

え、あそうです

園長

恵美ちゃんから聞いたよ、話通り優しそうなええ男やない

恵美

それでこれが娘

佳子

佳子です

園長

おお佳子ちゃん、恵美ちゃんの若い頃そっくりや

佳子

：そうですかね

園長

しっかり者でねえ

恵美

私が働きよった保育園の園長先生

園長

今はもう引退しとりますけどねえ、ご縁があつたんよねえ

恵美

わざわざ来てくれるっち思つてなかつたです

園長

なんがね、こんなお世話になつとるのに、(佳子たちに) ねえ

恵美

(少し前に出て) つづきまして母恵美が一番長く務めたみやび保育園で当時園長でありました畑尾安則さん、お願いいたします。

園長

おほほ

園長、紹介され前に出てくる。一礼

畑尾

恵美さんの御霊前に謹んで哀悼の辞を捧げます。

恵美さん、いや恵美ちゃん、こうして君の前の遺影に立つことになり、誠に残念でなりません。恵美ちゃんは子どもにはもちろん、我々上司部下関係なく仲間にも慕われる優しい心の持ち主でありました。私が、恵美ちゃんのことを優しい方だと最初に認識いたしましたのは、私が不倫疑惑をかけられ園内でも非常に肩身の狭い思いをしていた時です。何せ保育士というのはおばちゃんが主でして、おばちゃんというのは嗜好きが常でして、まあ根も葉もない噂を立てられたりもしましたが、そんな時、恵美ちゃんあなたは僕にこう声を掛けてくれたのです。「園長先生、人と人が出会うのはそれだけで何億分の一の確立で、出会えただけでご縁があるということとなんですよ、ご縁を大事にしつつける限りまたいい縁が巡ってきます。園長は優しいから沢山の縁を大切にすぎているのかもしれないね」。まあ実際火のないところに、という言葉もあります通り、確かに、確かに、妻がありながら、別の、女性に、気を惹かれていたのは事実です。ご飯も行ききました。しかし、しかしです、それ以上のことは何もありませんでした。本当です。えー、それだけは信じてほしいそう思っております。

恵美ちゃんの、ご冥福を祈ります。

園長、礼。

恵美

畑尾様、ありがとうございます。

園長

それではここから告別の辞に移らせていただきます。

恵美

こんなんになってしもうたけど  
ばっちりですよ

園長

わしの方が先死なんように頑張らなね

恵美、園長、朗らかに笑い合う。

佳子、孝美、その様子を不思議そうに見ている。



こんにやく芋のはなし

作 鶉飼秋子

【登場人物】

朝子 三人姉妹の一番上

比佐子 三人姉妹の真ん中

芳子 三人姉妹の一番下

朝子 さ、頑張るよ。

芳子 うん。

比佐子はすり鉢を押さえ、芳子がすり棒ですっている。

朝子は傍からそれを見ている。

比佐子 なんで急ぐん。

朝子 よっちゃん、大丈夫？

芳子 だめ、かも。

比佐子 どうしたん。

芳子 お腹減ったよ。

朝子  
がまん。

芳子  
どこまで擦るん？

朝子  
塊がなくなるまで。

比佐子  
え、嘘やん。

芳子  
まだまだやん。

芳子擦るスピードが遅くなる。

芳子  
ねえ、おろし金・・。

比佐子  
確かにドロドロにならんね。

朝子  
まず、潰そう、棒で。

芳子、棒で潰し始める。

芳子  
おろし金さえあればこんなんすぐ終わるんやないん？

朝子  
そのことは、忘れり。

芳子  
なんで！ねえ、なんで。

比佐子  
よっちゃん妙にこだわるねえ。

芳子  
だって、どこに行ったんよ。おろし金。

朝子  
ちゃんと探したらどこかにあるって。

比佐子  
ちゃんと探したん？

芳子 探したよ。だって、いつも水屋に入っとったやろ。

比佐子 誰か間違つて別のところに入れたんやない？

芳子 誰が？

朝子 そんなんわからんよ。

比佐子 お母さん？まさかなあ。

朝子 いつも使つとる人が間違うつてそれはないやろ。

芳子 なら、お父さん。

朝子 お父さんはおろし金やら触らんやろう。

比佐子 台所にすら入らんのに。

芳子 ・・好きやったのに。

比佐子 確かに、大根おろしはよっちゃんが一番の好物やった。

芳子 ひいちゃんだって。

比佐子 そうや。私らは大根おろしで育つたようなもんや。

芳子 ああ！おろしがねー！

芳子、ふたたび勢いよく擦り始める。

朝子 よっちゃん、その調子！

芳子 私らの朝ごはん返して！

比佐子 けど、ほんとに、うちのおろし金はどこに行ったんやろうか？

朝子 どうしたん、ひいちゃんまで。

比佐子 本当は誰かに盗られたんやないんね。

朝子 なんて？

比佐子 誰も水屋以外の変なところになおしたりせんやろ。

朝子 そうかねえ。

芳子 あ、怪しい！

朝子 へ？

比佐子 怪しい！

朝子 なにがよ。

比佐子 あさ姉は、嘘をついとるとき大抵「へ」って言う。

朝子 そうかねえ。

芳子 あさ姉は、何かごまかそうとするととき大抵「そうかねえ」って言う。

比佐子 やっぱり誰かがおろし金を盗っていったんやね。

芳子 誰なん。

朝子 おろし金とか誰も盗んだりせんやろ。

芳子 いいや、盗んだんや。

朝子 お米じゃあるまいし。

比佐子 お米と同じくらい価値があるんよおろし金には。

芳子 私らの体はおろしでできとる。

比佐子 そう、おろし金でできとるようなもんよ。

朝子 大根おろしね。

芳子 あれがなかったら朝が始まらんやろ。

比佐子

食べ終わったあとのほんのりとした渋み、広がる爽快感。

芳子

ありふれた朝ごはん、失って初めてわかるありがたみ。

朝子

よっちゃん、私ら今、なんしょん。

芳子

こんにやく芋、擦りよる。

朝子

そう、そっちに集中して。

比佐子

だから、おろし金さえあれば、芳子だってこんなつらい思いせんでもっと

朝子

早く細かく滑らかに擦れるんやん。

朝子

うーん。

芳子

大根おろし食べたい。

朝子

あ、よっちゃん、手止めたらいかんよ。

比佐子

誰がおろし金を盗んだんやろ。

芳子

もしかしてヨシダのオジサンが盗ったんやなかるか。

比佐子

なんでオジサンがそんなことせんならんの。

芳子

あの人んちの畑、大根いっぱいあるやろ。

比佐子

うん。

芳子

けど、おろし金はないんよ。

比佐子

そうなん？

芳子

やけ、いままでずっと羨ましかつたんよ、ウチが。

朝子

よっちゃん手が完全にとまっとるんやけど。

芳子

それでオジサンが盗んだんやなかるうか。

朝子

そんなんせんやろ。

芳子 あ、なんで庇うん。

朝子 誰が？私が？

芳子 そうよ、オジサンが盗んだのを、朝ネエは庇つとるんやない。

朝子 どうして私が庇うんね。

芳子 オジサンが好き。

朝子 なんでそうなるん。

芳子 それ以外に庇う理由なんかないやろ。

比佐子 確かにオジサンを庇う理由はそれしかないなあ。

朝子 歳が離れすぎとるやろ。

芳子 恋に歳は関係ないんよ。ね。

比佐子 確かに関係ない。

朝子 よっちゃん手が止まっとる。

芳子 好きなんやろ。

朝子 好きやない。

芳子 あやしい。

朝子 手、動かして。

朝子は芳子の手を動かし、擦る。

比佐子 この前おろし金はもう手に入らんっていいよった。  
芳子 なんのこと。

比佐子

オジサン。

朝子

へ？

芳子

どういう意味。

比佐子

わからん。おろし金は人気があるんやろうか。

芳子

みんながおろし金を買ってなくなったと？

比佐子

そうなんやろうか。

朝子

そうかねえ。

芳子

みんな大根めしに飽きて大根おろしが大人気。

比佐子

・あさ姉はなんか隠しとるやろ。

朝子

へ？

芳子

あ、「へ」って言った「へ」って。

比佐子

なんで手に入らんの。

芳子

なんで？

朝子

知らんよ。そんなん。

比佐子

いや、知つとるね。絶対知つとる。おろし金が消えたんわ、うちだけやない、きつと隣も向かいも、みんなの家からおろし金が消えたんや。世の中

からおろし金が消える。

これ、なんか、おかしいやろ。

おかしい。絶対おかしい。

・おろし金はお国のために旅立ちました。

朝子

はい？

芳子

朝子

比佐子 どうゆうこと？おろし金も兵隊さんになるん？

朝子 おろし金は武器になるんだって。

比佐子 どういうふうに。

朝子 よくはわからんのやけど。

朝子 どうやって武器になるん。

朝子 え、なんやろうか。こう、叩いたりするんやろうか。

朝子 おろし金で？

朝子 うん、頭とか。

朝子 痛いよ。ギザギザが痛い。

朝子 ああ、きつとそうよ。そうやって使うんよ。

朝子 違うやろ、弾をこう、よけるんよ。おろし金で。

朝子 あ、そうやん、絶対そうやん。そっちの方が役に立ちそう。

朝子 盾みたいなの、そういう役割よね。

朝子 そしたら、兵隊さんの服のこの、上着のところにおろし金を入れておくん

朝子 かもしれんね。

朝子 そんなことしたらギザギザが胸に刺さるんやない。

朝子 裏よ裏。

朝子 裏を胸にあてて、ギザギザを外に出す。

朝子 そしたら、服がギザギザでやぶれんかねえ。

朝子 じゃあギザギザを落とす。

朝子 そんなことしたらおろし金じゃないやん。



比佐子

もう武器にする時点でおろし金じゃないんよ。

芳子

そんならもう、大根おろしは食べれんでいいってことやろか。

朝子

実は、もうちよつと違う使い方やろうか。

比佐子

どんな。

朝子

こう、わからんように地面に敷いとつてさ。

芳子

うん。

朝子

知らんで敵が通ると。

芳子

痛っ！てなるね。痛っ！て。

朝子

そうやろう？

比佐子

でも、ほんとにそんなことのためにおろし金をとつていったん。

朝子

とつていったつていうか、差し出したんよ。

芳子

お母さんが？

朝子

・うん。

比佐子

ひよつとしてお寺の鐘が鳴らんのも、おんなじことなんかなあ。

芳子

そういえば最近、鳴らんね。

比佐子

もう、鳴つてもいい時間やん。でも鳴らん。

芳子

まさかお寺の鐘もなくなつたん？

比佐子

鐘もね、武器になつたんよ、きつと。

芳子

どうやって、武器にするん。鐘で人を閉じ込めたりするんかなあ。あ、爆

比佐子

弾を閉じ込めるんやきつと。  
けどなあ、夕方に鳴らさんのなら、それはもう鐘じゃない。

芳子 ああ・うん、そうやね。  
比佐子 そこまでして、武器が必要なんかね。

3人それぞれ少し考える。

芳子 ・大根おろし、もう食べれんごとになったね。

朝子 よっちゃん、大根めし、大根めしなら沢山食べられるよ。

芳子 やだ！

朝子 なんて。

芳子 ベチャベチャやもん。

比佐子 ご飯が少ないのをごまかしとるだけやん。私も嫌や。

芳子 大根おろしがいいよ。

比佐子 わたしらの朝ごはんよりやっぱり武器のほうが大切なんかな。

朝子 それは、比べられんのやないかなあ。

比佐子 あさ姉はどう思う？

朝子 へ？

比佐子 おろし金が武器になって私らは大根おろしが食べられんようになった。

朝子 どうって・・そりゃ、兵隊さんのためにおろし金は働くんやから本望やな

いんかな。

比佐子 ヨシダのおじさんもお国のために兵隊さんに行くって嬉しいことなんかな。

朝子 ・・・。

芳子 え、ヨシダのおじさん兵隊さんになるの。

比佐子 そうみたいよ。

芳子 なんて知つとるん。

比佐子 外で大人がそう話しとるのを聞いた。

芳子 いつ行くん。

比佐子 来週つて。ヨシダのおじさんだけやないよ。この町内から何人も行くんよ。

芳子 なんで？

比佐子 みんなおろし金と一緒にや。

芳子 ヨシダのおじさんおらんくなつたら、私らの大根はどうなるん。

比佐子 もう、もらえんよ。ヨシダのおじさんも盗つていかれるんやから。

朝子 ねえ、ひいちゃん。こんにやく芋擦つて。

比佐子 いや！なんもかんも盗つて、そんなんでほんとに勝てるん。

朝子 じゃあ、よつちゃん、擦つて。手動かして。

芳子 なんで、どうして、芋すらないけんの。

3人、お互いの顔を見て黙る。

朝子 ならいい。私が擦るわ。

朝子、擦り棒を手にとり、芋を擦り始める。

思いつきり、勢いよく擦る。

比佐子

ねえ、なんで、こんなにやく芋擦りよるん。

朝子は擦り続ける。

朝子

風船に爆弾ひっつけてアメリカまで飛ばすって・造兵廠で風船を作りよるんよ。

比佐子

なにそれ。

朝子

聞いたんよ。みんな、何枚も何枚も紙を貼り合わせて風船を作りよるって。紙を貼るのには糊がいるやろ。

芳子

うん。

朝子

こんなにやく芋を延ばして糊にするんて。

芳子

え？これ？

朝子

そう。

芳子

風船ってアメリカまで届くん。

朝子

さあ、知らん。風に乗って届くんやない？

芳子

届かんのもあるよね。

朝子

そりゃあるやろうね。

芳子

アメリカかって遠いんよね。ほんとに届くんかね。

比佐子

B 29とえらい違いや。

芳子

うん。

比佐子  
それで？

朝子  
・・・。

比佐子  
このこんにやく芋はどうするんね。

朝子  
そのうち、こんにやく芋もなくなる・・・そう、思う。

比佐子  
うん。

朝子  
そう思ったら、こんにやくを作っておかないけん、そんな気がしたんよ。

比佐子  
・・・でも、大人には黙つとかないけん。たぶん、そう。

比佐子  
そうやね。

朝子  
それで、ヨシダのおじさんにあげよう。オジサンたぶん喜ぶわ。

比佐子  
そうゆうことやったんか。

比佐子は、鉢を押さえて擦るのを手伝う。

芳子  
こんにやくはオジサンにあげるの？

比佐子  
うん。

芳子  
オジサンに大根のお礼？

朝子  
そう。

芳子  
私もちよつとは食べていい？

比佐子  
いい。

朝子  
できたら、オジサンと4人で食べるんよ。

芳子  
うん。私、お湯持ってこようか。

比佐子

お願い。

3人はこんやくを作り始める。

いただきます

作 大迫旭洋

【登場人物】

父

娘

夫

妻

老人

老婆

戦後・昭和・平成という別の時間軸がある。

それらが渾然一体になって、物語は進んでゆく。

三人の女が舞台上にいる。

広場で一人遊びをしている娘。

家で一人眠っている妻。

レストランの椅子に一人座っている老婆。

そこに、ノックの音が響く。

【昭和】

昭和三十五年。

夫が、妻のもとへ帰ってくる。

ただいまー

……

おーい

ん

キョウコー？

あ、はいはい

妻、夫を迎えて

おかえりなさい

うん

早かったね

ごめん、寝てた？

あ、ちよつと、お昼寝

そっか

妻 夫 妻 夫 妻 夫

妻 夫 妻 夫 妻 夫



妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻

会社は？

……えーとね、ちょっと、決めたことがあつて  
え？

や、俺もどうしようか、迷ったっちゃけど  
え、何何？

ついに、決めました！  
だから、何を？

キョウコ  
はい

俺、会社、辞めます  
……は？

そして、喫茶店やろうと思います  
……

言えたー  
いやいや

あー、すっきりしたー  
え、本当に？

うん  
でも、働き

働きはじめたばかりだけど  
だよ？

夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫  
うん  
結構良い額、もらってるよね？  
一ヶ月に三千円くらい、もらってますね  
うん、なら  
だけど、決めたから  
……ちよつと、落ちつこうか  
うん  
コーヒー飲む？  
ああ、ありがと

コーヒーを入れる、妻。

【平成】

平成二十年。

老人が、老婆のもとへやってくる。

老人 すごいねえ  
老婆 ん？  
老人 最近のトイレは  
老婆 何？  
老人 近づいたら、ウイーンって、（便座が）勝手に開いたよ

老婆 ああ、ありますね

老人 うん

老婆 未来みたい

老人 そうねえ

老婆 ……ありがとう

老人 え？

老婆 今日、連れて来てくれて

老人 いやいや

老婆 すごく、美味しかった

老人 たまにはね

老婆 ん？

老人 いつも、もてなす側だから

老婆 はい

老人 うん

老人、咳をする。

老婆 大丈夫？

老人 ごめん

夫 (コーヒーを飲んで) はあ

妻 落ちついた？

夫 うん、まあ  
妻 良かった  
老婆 あなた  
老人 ん？  
老婆 薬は？  
老人 ああ、そうだった

薬を飲みはじめ、老人。

【昭和】

夫 良くない？ 喫茶店  
妻 んー  
夫 最初はさ、狭くていいんだ  
妻 俺、マスターで、キョウコが料理つくって、  
妻 美味しいご飯とおしゃべりで……  
妻 や、いいかも知れないけどさ、あまりに急じゃない？  
夫 まあ  
妻 お金ためてからでもいいんじゃない？  
妻 や、でも  
妻 ん？  
夫 もう言っちゃったから

妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻

は？え？

うん

え、会社に？ 言ったの？

……はい

え、何で？ 何の相談もなしに

驚かせたくて

いやいやいや

驚いた？

驚いたよ！

ふふふ

ふふふ、じゃねえわ

え、だって

ん？

実家、お店でしょ？

まあ、そうだけど……

ね、お腹すいた

は？

ピラフ、食べたい

……もー

妻、料理しはじめる。

【戦後】

昭和二十三年。  
娘のもとに、軍服を着た父がやってくる。

父 キョウコ

娘 ……え？

父 ただいま

娘 お父さん？

父 ああ

娘 お父さん、お父さん！

近づく娘。父、抱きしめる。

娘 ううううう

妻 え、何ピラフにする？

夫 何でも

妻 そういうの困るなー

夫 じゃあ、お肉入れて

妻 はいはい

父 遅くなっとな

娘　　ううん、ううん  
父　　キョウコ  
娘　　お父さん  
父　　うん  
娘　　会いたかったあ  
父　　……うん、うん  
娘　　あああ

【平成】

老人　色々あったなあ  
老婆　ん？  
老人　あつという間だ  
老婆　です、ね、あつと言う間です  
老人　うん  
老婆　はい  
老人　来て、良かった  
老婆　来て、良かった  
老人　……すまんね  
老婆　どうして？　謝らないで  
老人　うん  
老婆　あなた

老人  
ん？

老婆  
ありがとう

老人  
ああ、ありがとう

老婆  
はい

老人  
たくさん、迷惑かけたな

老婆  
いえいえ

老人  
あ、そうだ

老婆  
はい？

老人  
ちよつと、待ってて

老婆  
はあ

席を立つ、老人。

【戦後】

父  
キヨウコ

娘  
ん？

父  
お腹、すいてないか？

娘  
ううん、大丈夫

父  
さつきね、みんなでお味噌汁食べたよ

娘  
そっか

父  
ちよつと薄かったけど、美味しかった！



父 娘 父 娘 父 娘 父 娘 父 娘 父 娘 父 妻 夫 妻 夫 父

うん

あ、いい匂い

ホント？

うん、楽しみー

ははは

そうだ

ん？

キョウコに、お土産

うわー

綺麗だろう？

これ、何？

こんぺいとう

へえー

とっても甘い、お菓子だよ

食べられるの？

うん

なんか、もったいない……

そうだね

こんぺいとうを見つめる、娘。

【昭和】

夫 絶対、大丈夫だって  
妻 うーん  
夫 キョウコ、料理上手いし  
妻 と言うか、  
夫 ん？  
妻 もう決めてるんでしょ？  
夫 まあ  
妻 ……はい  
夫 お  
妻 分かりました  
夫 おお！ ありがとう！！  
妻 もー  
夫 ピラフさ、看板メニューにしよう  
妻 気が早いなー  
夫 ははは

【平成】

老人 お待たせ  
老婆 え？  
老人 お誕生日、おめでとう

その手には、ケーキがある。

老婆  
老人

わあ

ハッピーバースデー トウユー

ハッピーバースデー トウユー

ハッピーバースデー デイア キョウコー

ハッピーバースデー トウユー

ありがとう

さ、消して

はい

老婆  
老人  
老婆

吹き消して

老人

おめでとう

老婆

嬉しい

老人

70歳かあ

老婆

本当、あつという間ですな

老人

うん

娘

(こんぺいとうを見ながら) すごい

父

ん？

老婆	老人	娘	父	娘	父	老人	老婆	老人	老婆	老人	老婆	老人	老婆	老人	老婆	夫	妻	夫	妻	父	娘
はい	じゃあ、食べようか	分かった	まだあるから、食べていいよ	ん？	キョウコ	あははは	もう、嫌だ	お腹の子どものためにも	え？	力をつけてもらわんと	はい	うん	あなたと、お店が出来て良かった	どうも	キョウコ特製ピラフ	お、ありがとう！	いえいえ	お待ちせー	そうだね	宝石みたい	

妻 娘 夫 老婆

召し上がれ

いただきます

いただきます

いただきます

食事の光景が続く。

カブちゃん

作 大迫旭洋

【登場人物】

夫

妻

子

カブトムシ

婆さん

1960年ごろ。

その食卓は、絵に囲まれている。

絵描きの夫と、その妻、子どもの三人。

夫はどこかしら、落ち着きのない様子である。

汁物をすすする音が響いている。

妻

今日ね、

妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 子 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫

……

お父さん？ 今日ね、

……

お父さん

うん？

聞いてた？

ん、ああ

そう

美味しいね（汁をすする）

聞いてなかったでしょ？

いやあ

ねえ、タツオ

うん、ぼーっとしてたよ

そうか？

今日は、どうだったの？

え？

（絵を見ながら）進み具合は

んー、まあ、ぼちぼち

個展、もうすぐでしょ

まあ

間に合いそう？

夫 妻 子 夫 妻 子 夫 妻 子 夫 妻 子 夫 妻 子 夫 妻 子 夫 妻 子

……頑張る(汁をすすする)

まあ、あまり根詰め過ぎないでね

うん

(咳をする)

大丈夫？

ちよつと、

ん？

ちよつと、くさくて

本当？

うん

あれー、換気したんだけどな

(咳をする)

脳みそ、溶けちゃうらしいよ

シンナー？

そう

ごめん、気をつける

大丈夫？

うん

ちよつと、外の風あびてきなさい

はーい



子、外へ。

妻 ……ま、色々大変だろうけど、

夫 まあ

妻 応援してるから

夫 どうも、うん、ありがと

妻 いいえ

妻 あ、そうだ

夫 ん？

妻 このかき揚げ、食べた？

夫 うん

妻 どう？

夫 美味しかったよ

妻 これ、今日見つけた、お惣菜屋さん

夫 へー、いいね

妻 でしょ？ 眼帯してるおばあさんが、一人でやっててね

眼帯している婆さん登場。

妻 すごい優しくて、サービスしてもらっちゃった  
婆さん サービスするよー

夫 ……へえ  
婆さん あいあい  
夫 懐かしいなあ  
妻 ん？  
夫 や、実家の近くにも、そんな人いたなあ、つて  
妻 そう？  
夫 うん  
婆さん 僕、かわいいから、はい、一つオマケ  
夫 わーい  
妻 わーい？  
夫 え？  
妻 わーい、つて何？  
夫 え、俺、言ってた？  
妻 うん  
夫 そう  
婆さん 駄目だよ  
夫 え？  
婆さん 内緒、内緒……

婆さん、退場

夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫

あ、はい

ちよつと、大丈夫？

疲れてるのかな……

横になる？

いやいや、大丈夫

よく描ける、よね

え？

絵

ああ、絵

描くときのあなた、取り憑かれてるみたいよ

ホント？

うん

や、そんな風に見えるのか、考えたことなかった

何考えてるの？

描くとき？

そう

……今

今？

今を、残したい、のかな？

それで、蝶々？

いや、蝶々はもういないんだけど

夫 妻 夫 妻 夫 妻 夫 妻

うん  
蝶々がいなくなった、つていう、今があるから  
はあ  
思い出の蝶々と、この、今を、未来に残したい  
すごいね  
いやいや  
残るといいね  
ん

子、帰ってくる。

子 妻 夫 子 妻 子 妻 子 妻 子

ただいまー  
大丈夫？  
うん、スッキリした！  
あ、タツオ  
ん  
あれ、お父さんに見せた？  
まだー  
え、何？  
見せてあげて  
うん！

子ども、緑の虫カゴを見せる。

おお

カブトムシ！　メス！

捕まえたの？

うん！！

そうか、すごいな

公園の木に、おってね！

一発！　一発で捕まえたん！！

ねー

そうかそうか

何食べるんだっけ？

カブトムシ？

うん

スイカとか、あげとけばいいんじゃない

違うよ！

え？

カブトムシはね、スイカ食べると、下痢になるとよ！

そうなの？

そうよ！

子 夫 子 夫 子 夫 妻 夫 妻 夫 妻　　子 夫 子 夫 子 夫

カブトムシ登場。

夫だけが気づき、それに、気を取られている。

妻　へー、よく知ってたね

子　カワノくんがね、そう言っと思った！

妻　カワノくん？

子　うん、カワノくん、すごいんよ！

カブトムシの、オスもメスも持ってて！

捕まえて、増やしとるんよ！！

カブト　勘弁してつかあさい

夫　え？

妻　すごいね、カワノくん

子　うん！　呼ぼうか！？

妻　うちに？

子　そう！！

カブト　スイカは、

妻　そうね、いつか遊びにきて

子　うん！！

カブト　下痢になりますけえ

夫　……

妻 あなた？  
夫 え？  
妻 どうしたの？  
夫 いやあ、何でも  
子 ねえ  
妻 何？  
子 カブトムシにもご飯あげたい！  
妻 そうね  
子 うん！！

再び、婆さん登場。  
カブトムシ、婆さんに向かって歩き始める。

婆さん あら、久しぶり  
カブト どうも  
婆さん サービスするよー  
妻 何食べるかな？  
子 うんとね！ これもカワノくんが言ってたんだけどね！  
婆さん ゼリーがいいって！！  
カブト ゼリーあります？  
妻 ゼリー？

子 そう、昆虫用の!!

カブト 昆虫用の

妻 んーそれは

妻・婆さん うちはないねえ

子 そっか

カブト そうですか……

子 それならね!

カブト おっ

子 リンゴでもいいって

妻 リンゴ?

カブト リンゴあります?

妻 それなら

妻・婆さん うちにあるよ

夫・カブト よっしゃ!

妻と子ども、驚いて、夫を見る。

妻 あなた?

子 おとうさん?

夫 ……え?

妻 何、よっしゃって?



夫 妻 夫 妻 夫

よっしゃ？

うん

え、俺、よっしゃって、言ってた？

うん

あ、ごめんごめん

カブトムシと婆さん、なぜか首を振っている。

子 妻 子

リング、もらっていい？

持ってくるね

やった！

妻、台所へ。

夫 子 夫 子 夫 子 夫

えー、と

おとうさん？

え？

どうしたの？

や、なんでもない、なんでもない

そう？

ああ

妻、戻ってくる。

妻 はい、リンゴ  
子 ありがとう！  
カブト うふふ、楽しみですな、楽しみですなあ  
子 はい、どうぞ

虫カゴの中にリンゴを入れる子ども。

子 わー、食べてる食べてる  
カブト (食べている)  
子 おいしい？  
カブト (食べている)  
妻 良かったね  
子 うん！！  
夫 あ、はははは  
子 え？  
妻 何、どうしたの？  
夫 や、何か、懐かしくて  
妻 そう？

カブト (食べ終わり) はあ……  
夫 タツオ  
子 うん?  
夫 夏休みは、楽しいか?  
子 うん!  
夫 お父さんのころも、楽しかったなあ  
子 いいよね  
夫 宿題が、めんどくさいけどな  
妻 あ、宿題は? 進めてる?  
子 もうー  
夫 あ、ごめんごめん  
カブト いますよ  
夫 ん?  
カブト ここに  
夫 ……  
妻 タツオ  
子 なにー?  
妻 カブトムシさんに名前、つけてあげたら?  
子 うん!  
カブト はあ、名前かあ  
婆さん なんだろうねえ

夫 カブちゃん、とか  
子 あー  
妻 いいんじゃない？ カブちゃん  
子 ね  
カブト まあ、いいか  
夫 じゃあ、決定！  
妻 はーい

子ども、虫カゴを見ながら、

子 カブちゃん  
カブト ……ありがとう  
夫 いえいえ  
婆さん 良かったね  
カブト うん  
妻 かわいいね、カブちゃん  
子 あんねー  
妻 ーん？  
子 カワノくんがね、カブトムシキングなんよ  
妻 キング？  
子 うん、カブトムシの、バトルの

妻　へー

カブト　……ん？

子　だから、カブちゃん育てたらね、バトルさせる！

妻　へー、いいねえ

カブト　マジかよ

子　おっきくなってるねー

カブト　私、メスだぞ

洗濯川

作 寺田剛史

【登場人物】

母

深雪 母の娘

男

母とその娘が風呂敷を背負ってやって来る。川岸まで来ると二人は背負っていた風呂敷を下ろす。

深雪

着いたー。重かった。

母

よし、そっちのからやろう。

深雪風呂敷をほどき始める。そこへ、川の向こう岸に首からラジオをぶら下げ、下半身を葉っぱで隠したほぼ全裸の男が現れる。

深雪

あー!!

母

なんねどうしたんね。

深雪

あーあーあー。

母

何ね何ね。

深雪

見て！

母は深雪が指した方を見る。

母

キヤーー。

深雪

カッパちゃんや！

男

カッパやない！

母

キヤー葉っぱ！

男

隠しとるんです。

母

え？

男

え？隠れてとるでしょ？

母

ちよつとなんなんですか服来て下さい！

男

干してて乾いとらんとです。

深雪

カッパちゃん！

男

カッパやない！

深雪

え？神様なん？

男

なんで？

深雪

カッパちゃんは神様ってやってばあちゃんがいいよった。

男

カッパやないし神様でもないよ！

母 とにかく葉っぱして下さい！  
男 え？

母 あ、ちゃんと葉っぱじゃなくしてして下さい！  
男 ちゃんと葉っぱしてますよ。

深雪 葉っぱちゃん？

男 葉っぱちゃんなんね。

母 服！来て下さい！

男 乾いとらんとですよまだ。ほらあそこ。

母 ああ？、ああ、そう言う事、にしてももうちょっと大きな葉っぱあったで  
しよ。

男 この辺はこんぐらいの葉っぱしか無いけ、はみ出そうではありますが、すみ  
ません！

母 どうにかならんですか、子供も居ますから。  
男 そんな事言われても。そか、分かりました！

男、一旦消え、

深雪 カッパちゃんじゃないよね。

母 カッパかもしれんよお。

深雪 カッパちゃんやったら凄いね。

母 本当にカッパやったらね。



深雪

カッパちゃんやったらばあちゃんに教えちゃう。

母

カッパかどうか聞いてみようか。

深雪

うん、カッパちゃんやったらいいね。

母

そうね、もしかしたらカッパかもしれないね、いや、本当にカッパかもしれないね。

男、濡れた軍服を来て首からラジオを下げ再び現れる。

男

これでいいでしょうか。

母

え？す、すみません!!

男

乾いてないから体にくっついて気持ちが悪いよ奥さん。

母

すみません！そうとは知らなかった物で！すみません！

深雪

兵隊さん。

男

やめて下さい奥さん、そんなに恐いですか兵隊が。

母

いや、恐くはないですけど。

男

そんな謝らんでください。

母

でも……。

男

そんなに怖がられたら、私らがなんか悪い事しとる見たいやないですか。

母

いや、そんな事は……でもどうしてこんなところに。

深雪

どういうこと？

母

兵隊さんがこんな所に。

深雪

でもおる。

母

うん。(男に) 帰ってこられたんですか？

男

これでいいですか？

母

すみません！ありがとうございます。

深雪

カッパじゃなかったね。

母

でもなんで・・・。

男

軍服だけ洗うつもりがこの天気でしょ。

なんだか気持ちがよくなくなってしまって、えーい全部洗ってしまえってな具合で。

母

でもどうしてこんな所に？

男

私ですか？

母

はい。

男

兵隊なのに。

母

はい。

男

それがよくわからないんです。

母

分からない？

男

森の中を目的地に向けてまっすぐ進んでいたんですが、気がついたら皆いなくなってしまう。仕方がないので一夜明けたらまず皆を捜そうと野宿したんですが、目が覚めたら昨日は聞こえなかった川の音が聞こえてきて、来ると本当に川で。そして今、ちよつと洗濯して一休みして、仲間を捜しに行っている途中です。

母 そうですね。会えるといいですね、皆さんに。

母 もうすぐ会えると思うんですが。

母 ・ ・ ・ それにしても急に葉っぱで出て来たもんですから娘がカッパだカッパ  
だつて大慌てで。

男 おーい。カッパじゃないよー。

男 見たら分かるー。

深雪 ああ。

男 あのー。

男 はい。

母 こんな事聞いていいのかわかりませんが . . .

男 なんですか？

母 もう飛んでこないって本当ですか？

男 何が飛んでこない？

母 飛行機。爆撃機。

男 奥さん！そんな噂に騙されてはいけません。

母 幾ら空が綺麗でも、空襲警報がなったらすぐに避難です。

男 それがもう避難しなくていいって。

母 避難しなくて良いなんて事はありませんよ

母 まだ戦争は終わってないんですから。

母 でも、

男

本来ならこんな所で洗濯してる事自体危険極まりない。しかし、私もこの川の青空の下でこうして川の流れを見ながらほとんど全裸の状態で解放されていると、自分は、娘さんじゃないですけど、カッパになったんじゃないかって不思議な心地よさに包まれるんです。気持ちは分かります。でも危険は危険ですから。

母

もう飛行機は飛ばなくなっちゃって、空襲警報も聞こえなくなっちゃって、そうです。そうやって毎日ここで洗濯できる日が来ますから。

母

そうですか。  
はい。

深雪

戦争終わったらカッパも出てくるかな。

男

戦争が終わっても終わらなくてもカッパは出てこんよ。  
なんでよ。

深雪

カッパは水の神様やから、そんな簡単に人の前に出てこんのよ。

深雪

そうなん？  
そうかもね。

母

じゃあどうやったらカッパに会えるん。

男

どうやったらって、んー。

深雪

ねえ、かーさん、どうやったらカッパに会えるん。

母

わからん。

深雪

え？  
わからんよ。だってカッパは神様よ、簡単に会えん。

深雪

わからんやん。

母

だつてお母さん神様見た事ないけたい。

深雪

そうなんか。

母

神様なんかおらん。

男

奥さん！それはおかしいでしょ。神は

母

すみません、カッパの話で。

男

ああ、カッパの話か。

母と男笑う

男

それじゃあ私そろそろ。

深雪

おいちゃんもう行くん？

男

うん、みんなを探さんといけんけね。

深雪

そうなん。

男

行きよつたら服も乾くやろ。

深雪

でもみんなも悪いね。

男

なんで？

深雪

おいちゃんおらんかったら探したらいいのに。そしたら、おいちゃんも探す、

母

みんなも探すですぐ見つかるやん。

深雪

みんなもおいちゃん探しよるかもしれんよ。  
探してないよ、もう行ってしまつとるよ。

男 戦争はまだ終わってない。おいちゃんなんか探しとる場合じゃないよ。

行き先は分かつとる、大丈夫。

そうなん、そこ近い？

ちよつと遠い。

どこ？

川の上の方。

川の？

うん。

この川？

うん、この川。

お気をつけて。

それじゃあ。

さよならー。

男、去る。

深雪 かあさん。

母 ん？

深雪 あのおいちゃん嘘つきや。

母 どうして？

深雪 朝起きたら川があつたって言いよつたよ。

母 よくわからんっていいよったね。

深雪 でも行き先この川の上って。

母 うん、

深雪 たまたま見つけた川の上が行きたかったとこなん？

母 違うね。

深雪 なんで嘘つきなん？

母 本当の事言いたくないんやろ。

深雪 なんで？

母 何でやろ、おかあさんにはわからん。

深雪 言えば良いのに。なんで嘘つくんか分からん。

母 何でかねえ。おかさんにはわからんよ。なんでか。

深雪 ふーん。かあさん洗濯。

母 よし洗おう。

深雪 戦争も終わつとらんって言いよったし。

深雪は防空頭巾を出して洗おうとして

母 それはもう洗わんでいいよ。

深雪 うん。

それもきつと本当

作 寺田剛史

【登場人物】

敬子 中学1年生

父

女中

女の女

母 敬子の母

昭和28年頃

日明 冬

家に帰ると父が居た。

毛皮を着た女が入ってくる

女 主人を迎えに来ました！

女中 え、あ、はい、お呼びします。少々お待ちください。

女 お邪魔します。

女中 え、あ、ちよつと、お呼びしますからお待ちください。ちよつと！



女は家の中へ

部屋の中には、父、女、女中、敬子、母が布団に寝ている。

女は布団に寝ている母を見て

女 なるほど、やっぱりね、そう言う事ですか。

父 なんかか。

女 (父を見て) で? . . . 何しよると?

父 もう帰る。

女 何しよるとじーつと座って。

父 帰る。

女 まさかち思つて来てみたら本当におるし、やっぱりそういう気持ちでしょ!

父 なんかそう言う気持ちって。

女 そう言う気持ちですよ、得意の優しいやつですよ。

母は寝返りを打つ

女は父の鞆を取り出て行こうとして

女 お邪魔しました。

敬子 いってらっしゃい。

女 . . . え?

敬子 え？

母 (少し起きて) え？ (また寝る)

女 いったらっしゃい？ん？どうゆこと？

敬子 お父さん行ってらっしゃい。(女中に) なんかおかしい？

女中 いや・・・。

女 バカにしとるよね。

敬子 してないですよ。

女 しとるよね。

敬子 してないよね。

女 誰に聞きよるんねっちゃ。

敬子は女を見る

女 なんじつと見よると？

敬子 別に。

女 なんかおかしい？

敬子 いや、高そうなコートやなって。

女 あーこれ？買って貰ったとよこの人に。

母はこっそりコートを見る

敬子 ああへー、温つかそう。

女 なん？

敬子 はい？

女 なんね。

敬子 え、なんですか？

女 なんねその目。

敬子 なんですか？

女 なんなんねその目。

敬子 なんか。

女 なんか？

敬子 なんかちや。

女 なんかちやちなんね。

敬子 なんかちやきさん、何しに来たとかきさんつち心の声が出てしまうぞこのやろう。

女中 出とるよ敬子ちゃん。

女 (女中に) なんねあんた。

敬子 それ下さい。

女 は？

敬子 そのコート下さい。

敬子は女が着ているコートを取ろうとする

女 ちよつとやめんね誰がやるね高いんよ！破れる！やめんね。

敬子 頂戴よ、自分で買ったんやなかるーも、これ着て学校行っちゃるわ！

女 離せ！

敬子 よこせ！この泥棒猫！

女 離せこのくそガキ！

敬子 このコート着るのはあんたやない！よこせ！

女中 ちよつと子供相手にやめて下さい。

女 なんねあんた、なんなんね入って来んで。

三人は女のコートを引っ張り合う。

母も起きて来てコートを引き張ろうと近づくと布団に引き返す

女 ちよつと！あんたまで引っ張らんでって！ちよつと！

女中 違う、違います！あたしは引っ張ってませんって！

女 引っ張りよるやんね！

女中 引っ張ってませんって！

女 引っ張りよるやんねて、ココ！

女中 引っ張ってませんよって！

女 元氣いいんやないんね！

女中 何がですか！

女 コート欲しさに起きてきよるやんね！

母 ゴホゴホゴホゴホ。

女中 奥様大丈夫ですか！くそこの離せ！

女 これはもともとあたしのよ！

敬子 容子さんもっと！もっと引いて！

女中 うん！

女 離さんね！

女、女中を押す。

女中は母の上に倒れる

女中 痛！痛ったー！

敬子 わ、お母さん！大丈夫！容子さん！容子さんも大丈夫！？

女 そんな痛くしてなかるーもん。

女中 病人の上に押し倒すとか人のする事じゃない！痛ったー！

女 しかも爪でガツちなつた、痛ったー！

女 知らんし。

女中 知らんしだあ？

敬子 わー赤くなつとる、痛そー！

女 ちよつとあたっただけやろーも。

女中 痛ったー、あー出よるわ、やっぱり出よるわ。

敬子 わーほんとや出よるわあ。  
女中 出てしまつとるよ敬子ちゃん。  
敬子 けっこう出よるよ容子さん。  
女中 出よるわー。  
敬子 出よるわー。  
女中 あー出よるわー。  
敬子 出てしまつとるわー。  
女 何がね！血か！血が出よるとか！  
敬子 見らんで！  
女 あんたらバカにしとるよね。  
敬子 してないっすよ。  
女 バカにしとるよね！  
敬子 してねーよ。  
女 だいたいこの状況でいつてらっしやいつてイヤミやろ！  
敬子 なんて。  
女 なんで私がこんなバカにされないけんのよ。  
女中 大きい声ださんでください。  
女 (父に) ちよつとなんとか言つてよ。  
父 帰ろう。  
女 そればっかり！さつきからずつとそればっかり。  
敬子 いつてらっしやい。

女 ちよつと何これ、私が悪いん？  
父 帰ろう。

女 バカなの？

女中 大きい声出さんで下さい！奥様が目を覚まします！

女 さつきからチラチラこつち見よるやないね！

父 帰ろう！

女 なんね！なんなんね！あんたまであたしのことバカにしてから！

女は父のコートを脱がそうとする

女 ちよつと脱ぎなさいよ。

父 ちよ、ちよつとなんか、なんかなんか、帰ろう。

女 早く脱ぎなさいよ！

父 ちよつとなんか帰ろう。

女 帰らんよ。

父 帰ろうよ。

女 帰らんけね。

父 帰らんの？

女 居るだけよ、いけんの。帰らせんけねバカにしてから！

父 何言いよんか、帰ろう。

女 いや！帰らん！

敬子

ごゆっくり。

敬子は部屋を出て行くこうとして

女 待たんね。

敬子 ・・・。

女 どこ行きよんね。

敬子 え？

女 どこ行きようとねって。

敬子 は？

女 帰るよ。

敬子 ・・・。

女 この部屋から一歩でも出たら、私、帰るけね。

敬子 ・・・どうぞ。

女 主人を迎えに来ました！

父 帰ろう。

敬子 いってらっしゃい。

女 帰らん！

敬子 どうぞ。

女 どっちよ！

敬子 こっちがどっちよ！



敬子 女

あたしが帰るか帰らんかはあんた次第よ！

迎えに来たんやろ？ やつたら一緒に帰つたらいいやん。お家から出かけるんならいつてらっしゃい。なんかいけん？ あと声が大きい。起きる！ 起きる起きる起きる！ 何なん！ 帰らんのならあたしは部屋に行く！ 帰るんやっても部屋に行くどうするんか！

女 父 女 父 女 父 女 父 女

あたたたたた、あいたたたたたたた。

なんかどうしたんか。

お腹が、お腹が痛い、あいたたたたた。

ほんとか？

女 敬子 女 敬子 女 敬子

本当よ！ いたたたたた。

そんなコート着とるけよ。

女 父 女 父 女 父 女 父 女

関係無いやろ！ いたたたたた。

どうしましょ？

ちよつとそこ横になれ。

母 女中 母 女中 母 女中 母 女中 母 女中

母が布団から起き上がる

大丈夫ですか？ ほらこれに寝かせてあげて。

父 敬子 父 敬子 父 敬子 父 敬子 父 敬子

奥様・・・  
大丈夫か？  
かあさん・・・ついに。

母　そこに敷いておあげなさい。  
女中　はい！

女中は部屋の真ん中に布団を敷く。

皆　．．．。  
母　ココにほら。  
女中　え、でも。  
母　いいからそこに。  
女中　はい．．．。

女中は痛がる女を布団に寝かす。

皆　．．．。  
母　さてと。  
皆　．．．。  
容子　容子さん、あたしもうきつくて動けないからちよつと肩貸してもらえる？  
容子　はい。

女中は母を支える

母 敬子、お部屋に行つてなさい。

敬子 かあさん……。

母 すぐ終わる。

敬子 ……。

敬子は一旦いなくなり物陰から見ている

母 さてと、よいしょつと。

母は女の寝ている布団に入り並んで寝る。

起き上がろうとする女を引っぱり戻す

母 まあまあまあまあ、大丈夫ですか？

女 ……。

女 しばらく寝てたら良くなりますよ。

女 ……。

女 こうして並んで寝る事なんてもう二度とないでしょうね。

女 ……。

女 よかったらあなたも一緒にどうですか？

父 いや、え？

母 三人で、並んで。

父 母 父

いや・・・。

あたしを挟んで寝てみるよ。

うん、でも、ああ、じゃあ。

父は、女と母を挟んで布団に入る。

父 母

あー。なんででしょこの並び。ありえないでしょこの並び。  
やっぱりちよつと（起きようとして）

母は父を引きもどす。

女 母 父 母

どお？お仕事、順調？

ああ。

そお。

あれ、ちよつと治ったかも（起きようとして）

母は女を引き戻す。

母

ランドセル、川に投げ捨てたんですって？やめて下さいね。学校行くの楽しみにしてるから。今度そんな事したら私、元気になつてあなたポコポコにしますよ。

母 女

・・・。  
若いつていいですよ。病気になるたら何んにも出来ない、出来なくなるから二人ともいつまでも健康でね。仲良くねってまでは言えないけども、まあ、それなりにいい感じでもいいですよ。

(起きようとして)

待ちなさいよ。

母 父

母は父を引き戻す。

母

もうちょっと元気があつたら、二人とも一人ずつぶん投げてポッコポッコにしてるとこなんだけど、なんせ元気が無くて、力もなくて、並んでありえない寝方をするくらいしか出来ない。あのね、あの子には学校へ行かせてあげたいの。ご飯もちゃんと食べさせてあげたいし。結婚だってさせてあげたい。大人と時代にぐるぐる巻きにされてしまっただけでいいじゃないか。どうなってしまうことやら。何でしようね、私、こんな人間なんでしょう。どんな人なんでしょう。今となつてはもう誰にも分からないけど、どうですか？どんなでしたか？覚えてます？ねえ、覚えてる？

俺に聞いてるか？

お腹痛いの嘘でしょ？迎えに来た、これは本当。もうこれくらいしか確実じゃない。

母 父

ほんつと嫌になる。どう残せばいいもんか、残したところでなんなのか。

父 何行つてんだお前。  
母 ありがとう。でもね全一然！違うよ。  
父 お前、誰か。

母、立ち上がる

母 あなた何しに来たの？  
父 何しにって、いや・・・あれ？  
母 私が心配で来たの？  
父 いや、いや待て、あれ。  
女 今更トボケてもあたしは何にも嬉しくない。  
敬子 あたしが呼んだ。  
母 そうなの。  
父 いや、呼ばれてない。  
敬子 あたしは呼んだ。  
父 いつ。  
敬子 いつも。  
父 いつも？  
母 向こうに行つてなさいって言ったのに。  
敬子 うん・・・。  
母 呼ばれて来たのか呼んだのか、呼んでもないのに1人で来たのか、あなたは

女 女  
母 母  
敬子 敬子  
母 母  
敬子 敬子  
母 母  
敬子 敬子

いったい何しに来たの？（女に）あなたもいったい何しに来たの？  
あたしは・・・。

連れ戻しに？

そうよ！

そうなの？あなたは達はココに、ゴホゴホゴホ

お母さん大丈夫！？

大丈夫。

座って、立ったまままだときつそう。

母は座る

女 女  
母 母  
敬子 敬子  
母 母  
敬子 敬子

で何よ、私たちがココに何よ。

あなた達は、あなた達はココにゴホゴホゴホ。

お母さん！無理しないで、ね。もう無理しないで。いいのよいいの。

思いつかないならいいの。

うん。

母は女を見る。皆も女を見る

女 女  
母 母  
敬子 敬子  
母 母  
敬子 敬子

なによ、なんなのよ、なんで見るのよ、なんで皆あたしを見るのよ。

帰ります！

女は行こうとして

母 待ちなさい。

女立ち止まり

母 一つだけ、最後に一言だけ。

母は襖の前に立ち、父に

母 行ってあげて、あたしはいいよ。これもきつとほんと。

母、襖の奥へ。



### 第3の男

作 渡辺明男

#### 【登場人物】

少年

女（少年の家の女中。名前はふき）

男（映画館のもぎり）

人を馬鹿にしたような軽快な音楽とともに、少年の手を引きながら女が駆けてくる。少年、バテてしまい、女の手を離してしまう。

女 あうぐ、早よせな！

少年 （肩で息をしながら） そげん急がんでいいとよ。映画は逃げんとよ。

女 すぐ始まるとよ映画は！

男 大丈夫ですよ。

いつの間にか、男が。

女 （男に） え？…あなたは？

男  
もぎりです。

女  
映画館の方？

男、答えずに鼻をほじる。

女  
あ、鼻…。

男  
まだ始まったばかりです。

女  
いやっっちゃ！始まつとるやん！

女、入場券を探す。が、見つからない。

女  
あれ？ 券どこいったんやろ。(少年に) 坊ちゃん？

少年  
僕知らんとよ。券げな知らんとよ。

男  
そこの売り場で買つてくーださい。

男、入場券売り場を指す。

女  
いえ、タダ券…無料の券を頂いたので、それを持って来たんやけど…。

男  
よっち。一緒に探しちゃるか。

男、女に触ろうとする。

女 (飛び退く) 鼻ほじった手で触らんのよ!  
男 ズボンで拭いたけ、きれいばい。おっぶ。(げっぶ)  
少年 もう始まるんやないと?  
女 (自らの体中をまさぐりながら) そげん急がんでいいとよ! 映画は逃げんとよ!  
少年 それさつき僕が言ったとよ。

女、「あら? あら?」などと言いながら、券を探している。  
少年、独白。

少年 彼女は、田舎から僕の家に来ていた人でした。本当によく世話を焼いてくれました。映画館に連れて行ってくれたり。昭和の始め、戸畑駅からずーっと来たところにあつたんです。いまはなかです。それでも、よく憶えています。

その時に観た映画のタイトルも。

『第3の男』!

そうよ。券がないと見れんよ。

ずっと楽しみにしとつたんです。

券がないと見れんよ。

『第3の男』。

男 女 女 男 女 男 女  
そうよ。ザ・サードマン! (「第3の男」)

女 第2の男も出るんやろか。

男 それは見てのお楽しみよ。ぶふふ。あ、いま主人公のホリーがウィーンの街にやってきたところかな…？親友に会いにね。

女 内容言わんで！あ、そういえば坊ちゃんのお尻のポッケに入れんやったやか。僕知らんとよ。

少年 ほら、さつき、アイスクーキ食べたとき。

男 お、僕アイスクーキ食べたんか。ええのー。の？

少年 僕、アイスクリームの方が好きとよ。アイスクーキは堅かと。

女 (男に) アイスクーキのほうが安かけん、よう買っちゃるんやけど、たまにアイスクリームも買うとよ？買うときは買うけん。

男 俺に言われても知らんちゃね。早よせな終わるばい。

女 (少年に) ほらポッケは？

少年、自分のズボンのポケットを探る。

少年 ないばい。

女 探した？

少年 探したとばい。石ころしかないばい。あい！(掛け声)

少年、石ころを投げる。

女 あっ。

石ころが壁に当たり跳ね返ってくる。

少年 あいたあ！

少年、額を押さえる。

少年 石ころが跳ね返ってきたばい…。

女 ほら、そんなんするけ、罰クソかぶるんよ。

少年 ふき、痛いばい！

女 はいはい。

女、少年の額に手を当て、さする。

女 痛いの痛いの…

男 (時計を見て) あ、いまごろヒロインのアリダ・バリが登場したところかな

…？

女 飛ん…(さするのを中断して) 言わんでいいんよ！？

男 (時計を見て) いや、主人公が事件の真相を突き止めようと決意するところやな…！

女 ああ…。言わんでいいのに…。  
少年 痛いときよ。まだ痛いときよ。

そこへ、滑り込みで映画を見に来たお客が現れる。  
男が入場券をもぎって案内する。

女 ずるい！今のお客は入れて！  
男 入場券を持つとれば入れるわ、そりゃ。  
女 あ、そうか…。ぶう。  
少年 痛いときよ！  
女 坊ちゃん、ちよつと券が落ちてないか見てくるけん、このおじちゃんのところにおるんよ。  
少年 まだ痛みがあるとよ。取れんとよ。  
男 あんた子ども置いて行ったら、いかんが。  
女 あ、そうですわね。あ、でも…。

女、辺りをきよるきよるして、券を探す。

少年 しこたま痛か！  
女 坊ちゃん、券を見つけたらさすつてあげるから、一緒に探してちょうだい。  
少年 さすつてくれんならもうよか！

女  
はぶててから。  
少年  
もう知らん！とんぴんはねる！

少年、駆け出す。

女  
あつ、どこ行きよんね！一人でこの辺うろろうしたら行けんのよ！

男  
あらら。こらいけんばい。

女  
一緒に捕まえて！

男  
『第3の男』も最後に犯人を追いかけるシーンが…

女  
いい加減にしーよ！

男  
いや、はは。ちよつとシッコしてからでよか？

女  
ダメに決まっところもん！

男  
いや、ずっと我慢しとったとよ！映画始まつたら行こうと思つとったとよ！

女、男をにらみつける。

男  
なんねもう。なんねもう！

男、便所に行こうと駆け出す。

男  
好かーん！

女も駆け出そうとするが、ふと立ち止まり、映画館の入口の方をじっと見つめる。

女  
・  
・  
・  
・  
・

男、小走りに戻ってくる。

男  
あんな勝手に入ろうとしよるんやないやろうね？

女  
一人分の料金ならあるとよ。

男  
どっだけ映画見たいんねあんな。追いかけてな！泣きよるばい！

女、泣き始める。

男  
なんであんなに泣くんね！なんね！どうしたんね！

女  
最後の映画やったのに…。

男  
まだ明日もあるばい。

女  
明日、田舎に帰るけ、最後の映画やったのに…。

男  
そうね。そらあれやけど…。

少年が戻ってくる。



少年　なんで追いかけて来てくれんと？  
男　あらら！いやいや、今から行こうとしよったんよ？本当よ？

女、嗚咽をもらす。

女　びゃああ…。

男　泣かんでよかが！

少年　なんで泣きよると？僕なんやない、泣くのは。(男に) 違うかね？

男　どっちも泣かんでよかが！

少年　ふき、なんで泣きよると？

女、不貞腐れて答えない。

少年　ふき、家出て行くとやろ？それで泣きよると？

女、問いに答えず、目元の涙を拭っている。

少年　映画見たら田舎帰るんやろ？

女　見らんでも帰ります。

少年　帰らんでつち、言ったやろ？帰ると？

女 帰ります。

少年 ぱぷらあ！（絶望）

女 二日市に帰ります。

少年 ほんなら、勝手にし！

少年、股間から特別鑑賞券を取り出し、放り投げる。

男 あっ！

女 ……。

女、散らばった特別鑑賞券を拾う。

女 券…。

女、少年を、叱るような目で見つめる。

女 なんてこんなことするんね。

少年 ……。

男 まあまあ、券が見つかってよかったやないね。これで映画見れるばい！ね？  
ほら、まだ始まったばかりやけ。

女、男を無視して、少年に詰め寄る。

女 答えんね。

少年 …嫁に行ったらいけん。

女 行きます。

少年 いけんっち言いよるのに…。

少年、口をとがらせて泣いてしまう。

女 こういう時はどうするの？謝らんの？

男が、少年と女の間に入ってくる。

男 まあまあ、お姉ちゃんが田舎帰るけ、さびしかったんやな？僕。

少年 ぶはあ〜あ〜！（泣く）

男 の？さびしかったけ、券隠しとったんやもんな？どこに隠しとったんか。  
お？

少年 パンツ。

男 そげなとこに隠しとったんか。

少年 そしたら玉袋に張り付いた。

男 玉袋に張り付いた！

女、男と少年に背を向け、顔を手で覆う。

男　こら、立派な男になるばい！（女に）のお？

女　知らん！

男　いやあ、そんな怒らんでもいい話ばいこれは！

あたしゃあわかるな！僕の気持ちがい！

少年　おじちゃん。

男　（満面の笑み）なんね？そうやろうもん。恥ずかしがらんでよかが！男同士

やけんの。おじちゃんが第1の男。僕が第2の男。そして『第3の男』は：

えー…。

少年　『第3の男』は誰なん？

男　第3は、えーと…。

男、一瞬困惑するが、すぐに得意げな顔をして女の腹を指差す。

男　ほら、お嬢さんのお腹におるのが第3の男…

女　まだ、そげなことしてません！

女、男と少年に背を向けたまま、怒る。

男 い、いやこれからよ。これから第3の男が。の？

女、何も答えず。

男 あ、あらら…。

少年、女に近寄る。その背中に向かって話しかける。

少年 怒つとる？

女 怒つとる。

少年 好かん？

女、首を振る。

女 …映画見らんのね？

少年 見るう！

女 じゃあ、早よせな。

少年 うん！

男 ごゆつくり。

少年と女、手をつないだまま、映画館へ。

男、タバコに火をつける。

男  
いけん。シッコしたかったのに、タバコに火をつけてしもた。

映画館の入口から少年と女の声が。

少年  
あ、アブラムシや！好かん！

女  
弱虫やねえ。いけんよ！

男、タバコを吸いながら、笑う。

そして、映画が終わり、少年と女が出てくる。

男  
映画どうやった？

女  
面白かったです！

少年  
怖かったんよ！でも、面白かったと！

女と少年、顔を見合わせ笑う。

男  
よかったよかった。

女  
お世話様でございました。

男  
では、田舎に帰ったら元気な『第3の男』を生んでください。

女 まだ言いよる。女やったらどうするんね。

男 いい女優さんも出てますき。『第3の男』は。

女 いい女優さんやったあ…！

男 そうやろ？

女 ラストシーンがよかったんよ！

男 そうよ。ラストシーンが一番重要なんよ。

女 余韻があったあ…。あのヒロインが歩いて行くところ！

男 あんたも負けとりやせんが。ははは！

女 またそんなこと言うて！

少年 ふき、アイス食べようや！

女 さつき食べたやないね、もう。

少年 最後やろ！一緒に食べようや！

女 もう。(男に) ほんなら、失礼します。

少年 早よ早よ！

少年と女、手をつないで、退場する。

男 なかなか、いいラストシーンやな…。ふふ…。

男、タバコに火をつける。

門司のヤンキー、喫茶店に行く

作 渡辺明男

【登場人物】

ミチオ（暴走族の少年）

ヤス（ミチオの友達。不良少年）

ヤス、人を待っている様子。タバコを吸い、貧乏ゆすりをしている。

ヤス あーちゅ。遅えな、バーロー。

ミチオ、バイクで登場。モジモジしながらバイクを降りる。

ヤス、タバコを足元に投げ捨て、踏みつけながら、ミチオをなじる。

ヤス ミチオー。おせえじゃねえかよう。

ミチオ ヤスウ。うっせえちやあ。母ちゃんがるせえけのー。遅なるんちや。

ヤス ウツソつけちやおめえ。ビビってんじゃねえかよう。

ミチオ ふざけんち。くらされるぞおめえよー。



ミチオ、立ち止まり、うつむく。

ミチオ

…足震えるちゃ。

ヤス

見てみー。屁っぴりこいとるやないかあ。大丈夫かちゃ。

ミチオ

なんでやあ！（自分の不甲斐なさを嘆く）

ヤス

ユキエ呼び出しとるんぞ。今さら逃げれんのぞ。わかつとるんかキサン。

ミチオ

おう、わかつとるちゃ。しつけーちゃ。どこに来るんかちゃ。

ヤス

あそこの喫茶店ちゃ。

ヤス、喫茶店を指差す。笑顔。

ミチオ

…喫茶店やん。そーとーまじい！

ヤス

なんかちゃ。ビビり過ぎちゃ。

ミチオ

俺コーヒー飲めんけーのー。ケーキしか食えん。

ヤス

大丈夫ちゃ。この喫茶店は最強やけ。

ミチオ

公園かと思つとつたきにい。

ヤス

公園は虫がいつぱいおろうが。

ミチオ

ユキエっち、虫好かんのか。

ヤス

好かんやろ。

ミチオ

100%かちゃ。

ヤス

女は大体虫好かんちゃ！そんな喫茶店イヤなんか！

ミチオ

椅子がフカフカで好かーん！

ミチオとヤスにらみ合いながら、舌を出し合う。

ヤス

ユキエ呼び出したの俺やけのお。

ミチオ

わかっとするちゃ。後でお礼するけ、待っとけや。

ミチオとヤス、微笑みあい、舌を出し合う。

ピースサインなどを出したり。

ヤス

ふふふ。よっしゃ。喫茶店行こうや。レッツゴー。

ミチオ

ちよっと待てちゃ。足震えとるんぞ。

ヤス

なんや、病気やないんかそれ。うちの爺さんも震えとったけのー。

ミチオ

お前見てこい。

ヤス

なんちい！？

ミチオ

喫茶店げなよう行かんけ、お前見てこいちゃ。

ヤス

何言いようとかキサン。俺が行ってどうするんかちゃ。

ミチオ

ユキエに伝えてこいちゃ。

ヤス

何をかちゃ。

ミチオ

「好いとー」。

ヤス

自分で言えちゃ！

ミチオ

ほんじゃあ、ユキエがおるかどうかだけ。それだけ頼むわ。

ヤス

それぐらいならいいけどのー。俺はお前の手下やないけのー。

ミチオ

早よ行つて来てちゃ。

ヤス

なんやあ！こらあ！

ミチオ

ユキエがおつたら、「○」。おらんやつたら、「×」。俺、ここで見よくけ。

ヤス

サイン出すんか。

ミチオ

頼むちゃ。

ヤス

おう。わかつたちゃ。そやけどお前、いいんか。

ミチオ

なんがや。

ヤス

喫茶店行かんで。

ミチオ

どんだけ好きなんかちゃキサーン！

ヤス

あの喫茶店は最強つち言いよろうがちゃキサーン！

ミチオとヤス、にらみ合い、舌も出し合う。拳を突き出したり。

ヤス

ほんなら、行つてくるわ。

ヤス、喫茶店のほうに駆け出す。

ミチオ

頼んだけのー！

ヤス

任せとけー！

暗転。

ミチオがヤスを呼ぶ。

ミチオ

ヤスウ！ヤスウ！

明転。

ヤスが「○」でも「×」でもないポーズを取っている。

ミチオ、混乱する。

ミチオ

あああ！？

ヤス、よくわからないポーズを取り続ける。

ミチオ

ヤスウ！なんやそのサイン！

ヤス、ポーズを取ったまま、動かない。

ミチオ

(小声で) おいつ。戻ってこいつ。

ミチオ、ヤスに手招きするが、ヤスは気付かない。

ミチオ  
おーい！おーい！

ヤス、ミチオの呼びかけに気付くが、笑顔で手を振り返すだけ。  
そしてまた、よくわからないポーズ。

ミチオ  
あいつう！…くらす！

ミチオ、喫茶店の方に駆け出す。  
暗転。

ミチオ  
なんしょんかキサーン！

明転。

ミチオがヤスの手を引っ張って、戻ってくる。

ミチオ  
（息を切らせながら）お前、約束と違うやねえかちゃ。  
ヤス  
マスターが、面白すぎるけ、それを伝えよつたんじゃ。  
ミチオ  
ほんならそう言えちゃ。わけわからんサイン出されたら、仰天するやろう  
が！

ヤス  
あの喫茶店のマスターがすげえんよ。おもしれーんよ。

ミチオ

店に入ったんか！

ヤス

ユキエおるかどうか見てこいっち、言ったやろうが。

ミチオ

外からチラッと見て来ればよからうが！

ヤス

外からはよう見えんのよ。あの店、こう奥に細長いけのー。

ミチオ

知らんちゃアンポンタン！

ヤス

おしほり下さいいっちマスターに言ったら、「はい。雑巾一丁！」っち。  
大笑いよ！けけけけ！

ヤス、一人で笑う。

ミチオ

お前なんしよんかちや！

ヤス

気持ちよからうが、おしほりで顔拭くと。

ミチオ

ユキエに見つかるやろうが！

ヤス

ちよつと話してきた。

ミチオ

んキサーー！ん！！なんしようとかー！ん！！

ヤス

ユキエ、タカスギさんと付き合いよるち。

ミチオ

タカスギさー！ん!?

ミチオ、固まる。

ミチオとヤス、見つめ合う。

カラスがカアと鳴く。

ミチオ 誰やタカスギさんっち…。  
知らん。門司のハンサムやろ。  
ヤス

ミチオ、遠くを見つめる。

ヤス なあ、ミチオ。

ミチオ …なんかちゃ。

ヤス あの喫茶店に行こうや。

ミチオ …行って何するんかちゃ…。

ヤス 名物マスターがおるけん、元気になるばい。

ミチオ 俺、帰るばい。

ヤス 奥さんもいい人やけん。真向法教えてもらおうや。

ミチオ 真向法つちなんか。

ヤス 健康体操たい。

ミチオ 帰る。

ミチオ、早足で自分のバイクに近づき、またがる。

ミチオ ブンブーン！ぶるるんぶるるん！（バイクをふかす）

ヤス ミチオ。ここらの人間はつらいことがあるとあの喫茶店に集まるんよ。

ミチオ

うるせえ！つらくねえ！むず痒いだけや！

ヤス

ミチオ。ピラフとスパゲチーがおいしいんよ。

ミチオ

どんだけ好きなんや、あの喫茶店！

ヤス

草野球の監督もしよるんぞ。マスターが。

ずっとホームラン打てのサイン出しよったらしい。ひやつひやつひや。

ヤス、サインの動きをする。先ほど、ミチオに見せたポーズと同じ。

ミチオ

さつきやりよったの、そのポーズやったんか！

そんなサイン出されてどうしたらいいんか！

ヤス

のう、1回だけ行ってみらんか。

ユキエを呼び出したお礼するつち言いよったろうが。

ミチオ

…そのユキエがおるやないか。

ヤス

もう帰ったわ。デートつち。

ミチオ

あうぐう…。

ヤス

あの喫茶店、元気になるけるけ。の？

ミチオ

名物マスターか。

ヤス

そうや。いろんな人に好かれとるけん。

ミチオ

待てちゃ。のぞくだけぞ。

ヤス

おう！夜露死苦！（気合い）



ミチオとヤス、喫茶店の方振り向く。

ヤス　マスターが手振りよるわ。行こうや。

ミチオ　おう！夜露死苦！（気合い）

ミチオとヤス、喫茶店の方歩いて行く。

暗転。

そして、明転。

ミチオとヤスが、店から出てくる。ヤス、手元にケーキを乗せた皿。

ヤス　どうやった。

ミチオ　最高やった。腹がよじれた。

ヤス　全然笑ってなかったやないか。

ミチオ　振られたばっかりなのに笑えるか！我慢しとったんやこのお！

ヤス　の？いい店やろうが。

ミチオ　うふっ…。ぐふっ…。

ミチオ、泣いてしまう。

ヤス　どうしたんや。

ミチオ　店…人…やさ…。

ヤス 店の、人が、やさしい。そうやろうが。

ミチオ、うなづく。

ヤス、ミチオにケーキを差し出す。

ヤス マスターからや。

ミチオ 冗談ばつかし言いよるな。あのマスター。

ヤス 奥さんもいい人やろうが。夫婦喧嘩せんらしいぞ。真向法もしよるし。

ミチオ 真向法はわからんけど…。あんな喫茶店実在するんか。

ヤス 門司に実在しとる。俺の父ちゃんと母ちゃんも通いよったけの。

ミチオ そんな昔からあるんか。

ヤス 門司にずっとあるんよ。

ミチオ 知らんかったわ。

ヤス ミチオ。

ミチオ なんや。

ヤス 俺たちも、通おうや。

ミチオ …。

ヤス いい店やろうが。

ミチオ うるせえちや。ユキエに振られた場所や…。

ヤス あーちゆ。

ヤス、ばつが悪そうに、ミチオから顔をそらす。  
ふと喫茶店の方に目をやる。

ヤス  
マスターがまた手を振りよる。

ヤス、身振り手振りで、マスターとやり取りする。

ヤス  
あ、皿？皿？あ、そうや。いけん。ほらミチオ。ケーキ。

ヤス、ミチオにケーキを手づかみで渡す。

ミチオ  
おい！

ヤス  
皿、返してくるわ！

ミチオ  
ケーキ、ふにゃふにゃやぞキサーン！

ヤス、手に皿を持って、喫茶店の方に走る。

ミチオ、一人で涙を拭う。

ヤス、走って戻ってくる。手には皿。ものすごい笑顔。

ヤス  
どうぞ皿までお食べくださいやって。ひゃっひゃっひゃ。  
最高やな、あのマスター！

ミチオ

…。

ヤス

ミチオ、お前が返しに行けや。マスターが心配しとったぞ。

ミチオ、ヤスから皿を受け取る。

ミチオ

ヤス…。

ヤス

なんや。

ミチオ

俺の負けや。通うわ。

ヤス

そうやろ。

ミチオ

行きたびに、ユキエのこと思い出すやろうけどの。

ヤス

いい思い出に変わるちゃ。そういう店や。あの店は。

ミチオとヤス、喫茶店の方を振り向く。

ヤス、店の方に向かって、手を振る。

ミチオ

クリームソーダ、あるやろか？

ヤス

おう、あるやろ。

ミチオとヤス、喫茶店の方へのろのろと歩き出す。

【平成28年度 公演情報】

北九州芸術劇場＋市民共同創作劇

「Re:北九州の記憶」

日程：平成29年1月13日（金）・14日（土）・15日（日） 14時 会場：北九州芸術劇場 小劇場

【構成・演出】 内藤裕敬（南河内万歳一座）

【作】 穴迫信一（ブルーエゴナク）、鵜飼秋子（さかな公団）、大迫旭洋（不思議少年）

寺田剛史（Block）、渡辺明男（バカボンド座）

【インタビュー協力】 有田深雪さん、角田桂子さん、坂根啓子さん、瀧口知宏さん、安田潤兒さん

矢野英枝さん

【出演】 有門正太郎（飛ぶ劇場・有門正太郎プレゼンツ）、内山ナオミ（飛ぶ劇場・さかな公団）

内田ゆみ（さかな公団）、大迫旭洋（不思議少年）、小田晏雄、片渕高史（宇都宮企画）

高野由紀子（演劇関係いすと校舎）、寺田剛史（飛ぶ劇場）、宮村耳々、森岡光（不思議少年）  
森川松洋（バカボンド座）、りんご（空中列車）

「スタッフ」

美術・権藤智海\* 照明・遠藤浩司\* 音響・雑賀慎吾\* 衣裳・内山ナオミ (工房MOMO)

演出部・小笠原敬子 照明操作・長濱幸治\*、磯部友紀子\*、安河内悦子

音響操作・横田奈王子\* 舞台監督・谷川哲朗\*

宣伝美術・トミタユキヲ (eADHOC)

広報・鬼木身和\* 票券・松岡美純\*

制作・吉松寛子\*、高橋優\*、雪見周平\* 劇場支配人・古澤玲\*

プロデューサー・津村卓\* (\* 北九州芸術劇場スタッフ)

主催…(公財)北九州市芸術文化振興財団 共催…北九州市

助成…平成28年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

企画・製作…北九州芸術劇場